光　跡

＃ボクらの島の

吉成タダシ

停止したままの運転席。ぼんやりと座る私。開けた窓に右肘をつく。
視界の右に動くものを感じる。見ると、蛇。数メートルもあるような大きな蛇がこちらを伺いながら、身体を宙に浮かせる。
目が合う。
えっ、とたじろぐ。が、どうすることもできない。蛇に睨まれた私。恐怖で身体が固まる。そんな私に向かって蛇は、スルスルと窓から入ってくる。ひーっ、と身の毛がよだつ。噛まれたらどうしよう、と思うが、この辺りの蛇なら大丈夫、とも思う。シートに背中を強く押しつける。蛇はその大きな身体をくねらせ、私に関心がないかのようにハンドルの方に身をよじり、そのままダッシュボード伝いに助手席の窓から出て行く。その腕よりも太い身体を、ホッとした思いで見送る。

変な夢――
その日の朝に見た夢を思い出し、嫌な気分になる。何かの暗示か、体調によるものか、たまたまの偶然か。
夏のような日射しに、眩い海からの反射光。まだ肌寒さは残るが、着実に進んでいる季節を感じる。
高速艇を降り立った船着き場であたりを見渡した渚は、想像していた以上にさびれた感じの港に、一瞬途方に暮れた。予定していた人物に会うのは午後だから、午前中はまるまる何も無い。夕方には予約している民宿に入るとして、午前中をどう過ごすか。
先に降りた数組の観光客は、みんなして同じ方向に進んでいた。そこに何かがあるのだろう。間をあけてあとを追う。客のカップルやグループが溜まっていたのは、観光客向けのレンタサイクルショップだった。そこで借りた電動自転車で島内をまわるのだ。前の数組の客がさばけたところで、若い女性に声をかける。
「あのう、すみません、一台借りられますか」
「ハイ、イイデスヨ。コチラニゴジュウショトオナマエ、デンワバンゴウヲ、カイテクダサイ」
こんなところにも中国の人がいるのか、と驚きを悟られないよう、自然に振る舞うように気をつかいながら、なんで気をつかってるんだろうと思った。それでも少しゆっくりめに、はっきりと言葉を返す。電動自転車の扱いについて説明を聞き、愛想良

く笑顔で軽く会釈をして、サドルに乗りペダルを強く踏み込む。
　初夏の空気が気持ちよく全身をすり抜けていく。当面行く当ては一カ所だが、どうやってそこに行けばいいのか。乗り慣れない電動自転車にハンドルをふらつかせる。進む先々で、同じような観光客が、あそこがどうとか、あっちがどうとか、指で示す顔が屈託なく輝いて見える。
　ショップで無料で配られていた、ひし形のような島の地図をあらためて広げる。午後に行くであろう目的地は左隅だ。とりあえずそこまで行ってみようか、と観念したようにそこまでの道をたどる。
　漁港特有の狭い路地を抜け、少し広めの自動車道に出るが、一台の車も走ってはいない。観光客を見かけた場所からはどんどん遠ざかっていく。見渡す限り信号機らしきものも見当たらない。
　人の気配がない。限界集落という言葉が頭をよぎった。限界集落と観光地。奇妙な取り合わせのようにも感じられるが、それが今のこの国の現実だと認識する。
　お地蔵さんがいくつも並んで立つＴ字路を左に折れ、緩やかな山道を登っていく。電動自転車であるのが幸いだ。道沿いに、一見してオリーブの木だと分かる植林がある。看板まで立っているが、誰に向けられた看板なのか。
　下り道になり進んでいくと、視界が開け海が一望できる場所に出た。海水浴場と書かれた看板が目に留まる。夏になれば誰か来るのかしら。もしかして観光客？そんなふうにも思えない。小さくとも綺麗な砂浜なのに、ここにも人の気配はまるでない。
　背中に浮いてきた汗がシャツにへばりつく。アスファルト舗装は途切れ、砂利道に変わる。ここから先は観光地じゃないのよ、とでも言われているようだ。石切場のような作業然とした、さびれた空き地を横目に進むといきなりあらわれた。
「関係者以外立入禁止」
　「立入禁止」だけ赤で大きく書かれた看板が、鉄柵に貼りつけられている。その錆びついた看板を前にして、仕方なく自転車から降りる。鉄柵に手をかけ覗き見るが、そこから先を伺い知ることはできない。それでも、ここか、と思う。胸の奥にべっとりとへばりついた、どす黒い何かを感じる。

　古民家を改装したような古めかしい店には、すでに数組のカップルや女性客がいた。テーブルもいすも、手作り感満載の木製だ。綺麗というのではない。しっとりとした

手触りで心地いい。
「何になさいますか？」
　島の住人ぽくない若い店員が尋ねる。
「何か食べ物は」
「あとは切らしちゃって、もうこれだけなんです」
　そう言って、掌でメニューを示した。
　島ソーメン。
「じゃあこれで」
　店員はすみませんと恐縮しながら、店の奥に引っ込んでいった。
　日本の漁港としては似つかわしくないような、どこか南の島国でも思わせるようなＢＧＭを聴きながら、このあとのプランを確かめる。
　昼食のあとは、高速艇を降りた船着き場まで戻る。研修に行くために指定された集合場所だ。研修にかかる時間がどれくらいだろうか。恐らくそのあとは、今日民泊する宿に入ることになるのだろう。
　翌日は、帰りの船便まで特に予定はない。せっかくだから観光地を見て回ろうか、と思うものの、実のところ島のことはほとんど何も知らない。かといって周りのカップルや女性客のようにキャッキャと話すような相手もいない。ひとりで考え、行動するしかない。

　昼過ぎ、高速艇で着いた待合所で座っていると、いかにも人探しをしているといった素振りの年寄りが入ってきた。
「植村さんですか？」
　渚が言って歩み寄ると、その年寄りは、立花さん？と声をかけた。
「はじめまして。すみません、今回は――」
　言おうとすると、いやー、よかったよかった、とマイペースに応じた姿を見て渚は、やっと地元の人間と会えたような気がした。
「この人がな、今日話してくれる石川さんいうてな、何でもよう知っとるから」
　植村の後ろから別の男性が現れた。朴訥とした、誠実そうな印象のおじさんだった。
「今日はね、他に島の高校生も二人、一緒に話聞くことになってるから。こっちでね、手続きしてね」

植村と石川に先導され、渚は待合室の一角にある事務所のような場所に連れて行かれた。こぢんまりとした部屋はいかにも事務所といった趣だ。一人でいた女性が親しげに植村と石川に声をかける。どうやらみんな旧知の仲のようだ。

ということは、みんな事件のことはよく知ってるっていうことなのだろうか――

人は忘れる生き物だ。たとえ大きな事件であっても、もう昔のことといえば昔のことだ。昔のこととなれば口を閉ざす人がいてもおかしくはないし、若い世代や子どもは、語り継がれない限り知ることはない。残念なことだとしても、それが世の常であることは、渚も分かりすぎるくらいに分かっている。にしても、この人たちはどうなのだろうという思いが募る。ましてや同行するという高校生たちはどんな動機で参加するのだろう。そのあたりにも興味が傾く。

必要事項に記名をして研修費用を支払うと、じゃあ行きますか、と植村に声をかけられ外へ出る。

「このあとは石川さんに案内してもろて。えーっと、終わるんが何時頃かな？」

石川が、四時ぐらいですかね、と返すと植村は、「じゃあ終わったら電話ちょうだいよ。そしたらまた迎えに来るから」と渚に言った。じゃあ石川さん、よろしくね、と言って白い軽自動車に乗り込んで行ってしまった。

「じゃあ行きますか。高校生の二人は車にいますので」

よろしくお願いします、と言って石川の後ろをついて駐車場に行くと、言っていた通り後部座席には高校生の男女がかしこまって座っていた。車はやっぱり白の軽自動車だ。

乗る前に、助手席のドアを開けたまま、こんにちは、と声をかけると、こんにちは、と爽やかな声が跳ねてきた。お願いします、とシートに身体を滑り込ませ訊いた。

「この島の高校生？」

「あ、はい。島いうても、この島には高校はないんで、隣の小豆島です。地元はこの島やけど」

男の子の方が快活に答えた。

「そうなんだ。はじめまして、立花渚です。よろしくね」

「あ、俺、内田弘章です。よろしくお願いします」

隣に座っている女の子に自己紹介するように合図を送ると、「もう、何馴れ馴れしく話してんのよ」とでも言いたげな目で、それでも少しはにかみながら応じた。